

月報

56号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

(A)は、朝鮮総督府農林局系統『朝鮮農地年報』

(A)		(B)	
件数	参加者数	件数	参加者数
1927 275	3,973	22	3,285
1928 1,590	4,863	30	3,572
1929 423	5,419	36	2,620
1930 726	13,012	93	10,037
1931 660	10,282	57	5,486
1932 300	4,687	51	2,910
1933 1,975	10,337	66	2,492
1934 7,544	22,454	106	4,113
1935 25,834	58,019	71	2,795
1936 29,975	72,453	56	3,462
1937 31,799	77,515	24	2,234
1938 22,596	51,535	30	1,338

これらの数字は、朝鮮農民運動史研究の基礎的な資料の一つなので、更に調査して確定しておく必要がある。

以上のような統計について気付いて使っている人もいれば(趙東杰)、そうでない人もいる。また、都合のいい方の数字を使っている人(金洛中、浅田喬二)もいる。

(B)は(A)に比し、治安対策的な観点から統計がとられたもので、重要な小作争議のみを集計していると考えられる。

九年までは数字が違っている。

6号(一九三六年三月)、10号(三十七年三月)、15号(三十八年七月)、19号(三十九年八月)、22号(四〇年三月)によって、一九三〇年～三九年までわかる。一九三〇年～三四年までは『治安状況』に同じだが、三五～三九年までは数字が違っている。

日帝下の小作争議に関する官憲統計について、特に一九三〇年代のものについては、混乱がある。今回の報告では、基礎的な小作争議に関する官憲の統計を整理してみた。

小作争議の件数および参加人数の統計について、九三四年までは一種類の統計しかないが、三五年より大幅に差のある左のような二種類の統計が存在する。

日帝下：小作争議に関する官憲の統計をめぐって
飛田 雄一

△第93回朝鮮民族運動史研究会例会報告

一九九〇年五月二〇日

第1輯(京城、一九四〇年12月、26～27頁)で、浅田喬二、柳世熙、姜善徳、朱奉圭などが使用している。朝鮮総督府『調査月報』、朝鮮総督府農林局『朝鮮小作年報』、『朝鮮経済年報』(昭和14年版)も同じものである。

(B)は、朝鮮総督府警務局『最近に於ける朝鮮治安状況』(昭和13年版に、一九二〇～一九三八年まで)、権斗榮などが使用している。『高麗警察報』2号、朝鮮総督府『朝鮮の小作慣行』(調査資料第26輯)も同じものである。

『満州共産匪の研究』(五四〇～五四二頁)および『思想叢報』の統計はまた違っているが、数字的には(A)(B)の間である。

第一二三回 在日朝鮮人運動史研究会

一九九〇年六月一〇日(日)

にあったように考えられる。

一九一〇年「韓国併合」前における

日本の出入国管理法制と朝鮮人労働者

金 英 達

一般に「労働移民禁止法」と言われている一八九九年(明治三二年)の勅令三五二号「条約若ハ慣行ニ依リ居住ノ自由ヲ有セサル外国人ノ居住及營業等ニ関スル件」が、在日朝鮮人社会形成にはたした積極的な意味を考察してみた。

従来の在日朝鮮人形成(渡航)史における通説的見解は、この勅令三五二号によって日本への中国人・朝鮮人の単純労働者の入国(海外出稼ぎ・移民)が阻止されたところ、一九一〇年の「韓国併合」により朝鮮人は「日本国民」となって、この法律の適用除外となり、以後朝鮮人の日本への出稼ぎ労働の途が開かれて、在日朝鮮人の「内地」渡航が始まった、としている。

しかし、勅令三五二号および付属法令の内務省令四二号、そして運用指針の内務大臣訓令七二八号の内容を検討してみると、この勅令の制定の趣旨および政策実施の実際は、当時日本へ押し寄せつつあった中国人の出稼ぎ・移民(華僑)の阻止・排除

これまでの地域研究でも、一九〇八年に着工された山陰本線の鉄道敷設工事に朝鮮人労働者がかなり従事していたことが明らかになっている(兵庫朝鮮関係研究会『兵庫と朝鮮人』)。すでに「併合」前において、朝鮮からの出稼ぎ労働者が多数、日本の土木建設現場で働いていたことがうかがわれるのである。このことは、勅令三五二号によって中国人労働者が排除された結果、その代替労働者として、朝鮮人労働者の日本への受け入れが促進されたのではないか、という見解を提出してみた。かりにそうであったとすれば、在日朝鮮人社会形成の出発点に関する従来の定説を変更しなければならない。

研究会では、この仮説にたいして、活発な議論がなされ、参加者から、「併合」前の日本在留朝鮮人の統計数の根拠となっている「日本帝国統計年鑑」の数字を原典にあたって分析しなおすこと、日本における華僑の歴史に関する先行研究を参照して在日華僑史における勅令三五二号の意義と比較すること、もっと「併合」前の日本各地における土木工事での朝鮮人労働者の歴史を掘り起こすこと、などの必要性が述べられた。

いずれにしても、在日朝鮮人史の始まりにかかわる基本的な問題であり、現今の外国人労働者問題の発生起源の問題でもあり、今後さらに文献史料を深く調べて、「併合」前の日本在留朝鮮人の実態に迫っていきたいと考えている。

《第七回 日韓在日キリスト教関係史研究会》

「私とキリスト教」

(五月二六日)

金 哲 顕

一九六四年四月、同志社大学神学部に入學した当時の私にとって、キリスト教信仰とは、幼い頃からそうであったように、聖書の逐語靈感説に基づいたものであった。つまり聖書の一字一字が絶対に無謬であるという信仰のあり方である。ところがこの聖書無謬論は、神学寮内での聖書研究会においてもろくも崩壊してしまふ。聖書の中には多くの誤謬があるということを笠原芳光氏にいくつかの例をもつて教えられ、その衝撃のために神信仰を失うに至り、無神論者になるのであるが、その結果は、六五年から六七年にかけての休學となつて表れた。しかし六七年にはカントの実践理性が神の存在と魂の不死を許すということを知つて、ひとまず神信仰を取り戻すことができ、六八年四月には復學することになる。

ところでカントの批判哲学は不可知論である。それは、認識主観が客観的対象そのものに到達できないということであるから、結局、主・客二元論ということである。これはデカルト以来の「精神（思惟）と物質（延長）」、近代精神における「魂と肉体」「宗教と科学」「信仰と理性」それぞれにおける分裂であり、神学的には「福音と世界」

の分裂である。だから私はカント派に属するキリスト者として最初は神信仰や魂の救済に目を奪われ、自分を取り巻く歴史社会状況に無関心であつた。

しかし六八年秋からは韓国学生同盟や韓国青年同盟などとの接触の下で自らの民族的・階級的問題に目覚め、そこから「福音」と「世界」を互いに関わらせようと努力した結果、それが一旦「キリスト者の社会責任」として結実する。だが六九年以降私は激烈な神学部学生闘争からマルクス主義について多大な影響を受けた。そして近代二元論を克服するのはヘーゲルの弁証法であること、キリスト教には本来、人間解放のための科学的方法論が欠如していること、を認めざるを得なくなった時、ついに弁証法的唯物論（マルクス主義）を受容することになったわけである。七〇年には既に私は民族主義者・共產主義者としての立場を確立していた。私はそれを在日大韓基督教青年会全国協議会（全協）の機関誌「燈台」各号及び「福音と世界」誌上に表出させている。これらに掲載された諸論が契機となつて私は七一年九月、南朝鮮革命家として包摂され、渡北した後、韓国に渡り、七五年十月、逮捕されるに至る。しかしくすしくも一三年間の獄中生活を過ごすなかで一種の神体験をする。それを通して最終的に私は再び神を回復したのである。

新図書案内

韓、日教会の歴史	金 守珍	ソウル 大韓基督書会	89年
朝鮮中世紀史研究	朴 貞奭、李 孟山	延辺大学出版社	
朝鮮族研究 論文[二]	延辺大学民族研究所	延辺人民出版社	1989年
延辺青年伝助史	金 東和	同上	
中国朝鮮族の歴史研究	高 永一	延辺教育出版社	1986年
延辺調査抄録	沈 茄秋	延辺大学出版社	1987年
韓国史研究 彙報 第67号	国史編纂委員会	京畿道 同所	1989年
後藤新平伝[国務大臣時代後期]	鶴見 祐輔	東京 太平洋協会	1944年
同上 [臺灣統治編]	同上	同上	1943年
同上 [満州経営編]	同上	同上	
同上 [国民指導者時代]	同上	同上	1944年
三均主義研究論集[7、8、10]	三均学会	ソウル	1986-1988年
연변대학 40년	(연변대학40년) 편찬위원회	北京 民族出版社	
연변4회주의 민족 관계의 형성과 발전	김연빈, 대유현, 김종국	"	"
조선 언어문화국제 토론회	조 문집	"	"
조선족 민속사 연구	박 경희	로녕 민족출판사	
용드레촌	연변력4회	연변 연민출판사	
중조친선 100년사회	김광수, 최종국	"	"
신재호 문학 연구	김 병민	로녕 민족출판사	
동방의 기적	장 세화	홍릉강 조선민족출판사	
연변 청년 운동사	김 동화	연변 민민출판사	

研究会御案内

* 在日朝鮮運動史研究会 第124回例会

日 時 1990年7月8日[日]午後2時

テーマ 「在日朝鮮運動史の報告と文献」

報告者 丹田 雅一氏

* 朝鮮民族運動史研究会 第95回例会

日 時 1990年7月15日[日]午後2時

テーマ 「大山鶴吉と朝鮮(1920年代前)の歴史」

報告者 丹田 雅一氏

* 日韓、在日キリスト教関係史研究会 第9回例会

日 時 1990年7月21日[土]午後2時

テーマ 「日本キリスト教史家の報告と文献」

報告者 「隅谷 喜男」(廣田 雅彦氏)「土肥 昭夫」(後藤 新平氏)

; 場所はいずれも青丘文庫にて